

インドで排水溝生産

現地法人に出資、技術移転

武井工業所

コンクリート製品製造の武井工業所（石岡市若松、武井厚社長）はインドでインフラ工事向け製品の現地生産に乗り出す。同業者らとの子会社を通じて現地法人に出資し、2020年8月に立ち上がる工場に技術移転を図る。排水溝をメインに製造し、国内の需要を取り込みたい考え。稼働から5年以内に1日当たり4500本の生産を目指す。

子会社は「日本アクシス（海道登別市）や、型枠製造インベストメント」（JAMメーカーのトヨタ工機（東京））。同業の上田商会（北）京）との共同出資で今年2



JAIが生産する予定の排水溝（武井工業所提供）

月に設立した。上田商会とは工場建設などで協力関係にあり、両社ともトヨタ工機から鋼製型枠の供給を受ける。

JAIは、5月中に設立登記を完了する予定の現地法人「Fuji Infrastructure Technologies PVT LTD（FIT）」に資本金80%を出資する見通し。残りの20%は、同国でPC製品を手掛ける日印合弁会社「Fuji Siliconcrete PVT Ltd」（FSC）が出資する予定だ。

FITは、8月（JAI）マハラシュトラ州アウランガバード市内のシェンドラ工業団地で工場の建設を始める。工場の敷地面積は約6万3千平方メートル。同工業団地に日系企業が進出するのは初めてという。

建設現場ではなく事前に工場をつくる「プレキャストコンクリート」のインフラ工事向け製品を製造する。工場の稼働開始は来年8月ごろの見込みで、営業面はFSCが協力する。

武井工業所と上田商会は

技術者を派遣し、製品規格や製造技術の移転を図る。現地で採用した技術者の日本国内での研修も行う予定だ。

武井工業所の横田一人管理本部長は、経済成長が著しいインドのインフラ需要を取り込みたい考えを示した上で、「日本の高品質で耐久性が高い製品が求められている」とした。

（小野寺晋平）